

●水環境・生物 (3-B-14-1～3-B-15-1)

本セッションでは水環境の生物に関する研究発表が4題あった。

3-B-14-1：浚渫跡地での埋め戻しによるアマモ場形成の検討についての発表である。アマモ場の再生においては、台風などの自然攪乱によって一時的に消失しても、自律的に回復する能力を有していることが必要となる。浚渫跡地で埋め戻しを行い、アマモの生育状況等をモニタリングし、天然のアマモ場との比較によって埋め戻しによる自律的なアマモ場形成の可能性について検討したところ、株密度は低下するものの天然生育地と同様、毎年繰返し出現し、浚渫跡地での埋め戻しはアマモ場の再生に有効な手法であることが分かった。

3-B-14-2：湖岸湿地帯における水供給と植生の関係（講演中止）

3-B-14-3：異なる地理的スケールでの湖岸地形と植生の関係についての発表である。霞ヶ浦湖岸における植生帯の保全に関する基礎的知見を得ることを目的とし、異なる地理スケールでの湖岸地形と植生帯の関係について検討した。浮葉・沈水植物帯は地理スケールを6km以上として評価した場合、岬の裾のエリアに確保することができ、さらに岬の裾のエリアから先端までの地形形状を湾に移行させることで、全植生帯の面積も広範囲に保つことが可能となることが分かった。

3-B-14-4：藤前干潟に生息する二枚貝類の水質浄化能力試験についての発表である。伊勢湾に位置する面積90haの藤前干潟において生息数が多い二枚貝6種類（ソトオリガイ、ヤマトシジミ、オキシジミ、マガキ、コウロエンカワヒバリガイ、ウネナシトマヤガイ）を用いて、透明度低下の原因となる植物プランクトンをどの程度取り込み、水質浄化に寄与しているかを室内実験により検証した。クロロフィルa量の変化については、明条件、暗条件の違いや二枚貝の種類による違いがあるものの、オキシジミを除いた他の5種類の二枚貝に吸収されることが分かった。

3-B-15-1：木津川の砂州の役割[魚類の砂州上に形成される一時水域の利用]についての発表である。仔稚魚が砂州上の一時水域をどのように利用しているかを調べることで砂州の役割を明らかにし、魚類にとって望ましい河川構造を提案することを目的としている。砂州上一時水域では、プランクトン量とユスリカ幼虫量ともに水際帯に比べて多かった。しかし、抽水植物に付着しているユスリカ幼虫量は、水際帯で多い傾向にあった。ニゴイの水域利用は、仔魚前期は水際帯、仔魚後期は砂州上一時水域、稚魚期以降は二次流路に多くのニゴイがみられた。

本セッションで発表のあった上記4テーマについて、調査・実験条件の確認、調査・実験結果に関する補足説明、研究成果の応用等に関し活発な質疑応答があった。

(土木研究所 小森 行也)